

おおせられ候やらん。これみなひがごとにて候なり」と示されている。こうした意味のことは、同鈔第十章第十一章等にも明らかに示されている。これ等のおことばから窺ってみると、真宗の学は他力信心の本質を明らかにし、その信に帰入する道を示す以外にはない筈である。而も宗祖が他力信心の解明と、その信への帰入について、最も重視された要点を取り上げ、それを真宗学の研究対象とすることが最も至当な道であろうと思ふ。

私は宗祖の聖教を大別して、讃嘆の聖教と、教化の聖教と二つに分けられるように思う。もちろん厳密な区別はできないが、讃嘆の聖教としては教行信証を始めとする漢文の聖教、並びに和讃等であり、教化の聖教と見るべきは御消息集（末灯鈔、御消息集等）語録（歎異抄、口伝鈔等）類であろう。ところで、われ等宗門人として第一に為すべきことは、何んと言っても、先づ宗祖の教化に直々接して自己の救いを明らかにすることであらねばならぬ。ところで、その教化の聖教の中でも、宗祖自身が「これ以外に言うべきことはない」とまで、ハッキリ明言された言葉に取組むことが最も大切であると思う。今、そうした言葉を御消息や語録から拾ってみると、善性編御消息集第七通に「他力と申すは行者のはからいのちりばかりもいらぬなり。かるがゆえに義なきを義とすと申なり。このほかにまた申すべきことなし」とあるところと、歎異抄第二章の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられまいらずべしと、よき人のおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」とある二ヶ所を取り上げることができるように思う。この二つの

表現をよく味読してみると、結局、念仏の行と計らない信の二つに結歸し、而も、その二つが教えを聞くことによって体得されることが示されているように思われる。かく窺うて見ると、真実の行信が「聞」の世界に於て人間の生活となる一点を究明することが、真宗学研究の中心課題であるように思う。

また宗祖はこの真実教を讃えて「絶対不二の教」とも「一実真如の道」とも言っておられる。この思召を受けてみれば、われわれ宗門人としては親鸞教学を単に宗門内だけに通用する真実教に甘んじてはならぬ。先づ仏教の根本原理と対照して、親鸞教学が仏教に於て何なる意義と地位をもつか、と言った点を究明し、更らに進んで一般宗教学、又は現代哲学とも対決して、親鸞教学こそ人間救済の最後の切り札であることを、自画自讃でなく公明正大な立場に於て、広く世界に示すことこそ、現代に立つ親鸞教徒に課せられた重大な使命ではあるまいか。この一事を成就する以外に真の世界的伝道もあり得ないと思うのである。

高倉の一轍と往生の善知識の強調

松 谷 了 玄

大谷派学寮は恵然の時代にその基礎定まり、学事は破竹の勢を以て一派全体に普及滲透し、而して学寮は宗学研鑽の中心道場としての性格を濃厚にして行くことになった。斯る学寮の隆

盛に伴って異安心事件の興起も次第に目立つ様になって来た。恵空以前には異安心事件として六・七の問題を数える程度で、而も其等は些細な事件に過ぎなかったが、恵空・惠然・慧琳の時代へと次第にその数を増し、加えて紛糾を重ねる大事件が顕われている。漸次に盛況に越く学寮と異安心事件の興起と、兩者の歩調の平行的上昇を辿っていることが知られる。殊に慧琳以後の時代となれば異安心事件は急激に増加し、驚ろくべき件数と非常なる紛糾を呈することになっているのである。

早くよりその萌しを見せていた高倉一轍思想は、享和・文化の頃となりて明瞭な姿を顕わすことになった。惠然・慧琳の宗学を以て真宗正意の安心とし、それを以て恵空以来伝統相泰せるものなりと断じて大谷派宗学界に君臨し、時代の進むにつれいよいよ強く叫ばれている。宗学草創期・普及期の諸学匠に殆んど見出し得ない「先輩の軌轍」「先輩の指南」「師資一轍」「先輩の相伝」等、之に類する言葉が、文化以降の学匠の著作の到る処に見られるであろう。我々は此等の言葉によって、文化以後の学匠が如何に強く高倉の一轍を叫んだかが知られるのである。

扱、私は高倉一轍思想が擡頭し、次第に強化せられるに就て、(1)学寮開創以来・年と共に異安心事件が増大し、殊に宗学全盛期に入りて非常なる件数を見、混乱紛糾を示すことになっているが、若し高倉相泰を強調すれば、此等の異安心事件の興起を未然に防ぐことが出来、また勃発せし場合は強大なる力を以て其等を調理出来るとの考。(2)この思想の強化は学寮講者の権威を高めるであろうし、随って講者は強大なる権力を以て門

末全体の宗意安心の世界に君臨することが出来るとの考。こうした二つのことが考えられるのである。勿論、学寮を支配する人々は初めより斯る意図のもとに高倉の一轍を呼号したと思われないが、然しながらかかる考が何時の間に学寮を支配する人々の脳裡に胚胎し来ったのでなからうかと思う。

高倉一轍思想の強化につれ、高倉の宗学に対する反抗的気運が在野学匠間に顕われかかった。それは慧琳歿後と思う。在野学匠の不満は次第に強くなり、文政以後となれば明瞭な姿をあらわし、不穩の形勢を深めている。北山・頼成・英巖等の人人々が如何に熾烈なる反抗を展開したかは、異安心に関心ある人々のよく知るところである。

讀って私は当時の国状そのままを大谷派宗学界の姿として見出す。周知の如く、宝暦・明和・安永の時代へと一般民衆の間に復古思想自由思想があらわれ、封建性に対する反抗意識が萌し初めている。幕府はかかる反抗的革新的思想に圧迫を加えることになるが、かかる幕府の圧迫に対し、一般民衆の間にいよいよ革新思想の高まるのは、此処に改めて述べるまでもないであろう。こうした国状と同様に、学寮は一轍思想を強化すればする程、在野学匠の学寮への反抗的気運高まり、反抗的気運が高まれば高まる程、学寮は高倉の一轍を強調するという状況となっている。

終りに高倉一轍思想を強力なるものとせる往生の善知識の力説に就て述べたい。これは「改悔文」所説の「次第相泰の善知識」なる言葉を「本廟相統の善知識」なる意味に限定せるが如く解し、更には「往生の善知識」なる言葉によって、宗主を宗

門人の往生に結びつけんとしていることである。こうした考は文化時代に入りての事と看做されるが、慧琳時代・既にその萌しを見せている。それは異安心の教誡に軽く善知識の「御慈悲」によることが述べられる程度である。然るに文化時代となれば宗主は宗門人全体の信心に結びついた善知識、往生の如何を左右するかのような善知識として、諸講者はかかる善知識観を宗門人全体の心に根強く植つけている。勿論、宗主を救主とする暴論にはなっていない。我々は宗学全盛期における斯る新たな善知識観は、異安心調理に於ける強力な武器となり、更には学寮講者の地位を高めるのに役立つことが知られる。要するに講者は宗祖・宗主・講者の三者一体なる考に基づいて、宗主は往生の善知識なることを強調し、それを以て異安心者を威圧する武器に、自己の地位を高めるために、宗主を利用せりと看做される。徳川封建的機構の影響の下に展開せる宗門の一面の姿と言ふべきか。高倉一轍思想も往生の善知識の力説も明治初期まで力を発揮して来たが、明治中葉となりて衰えている。

信心仏性について

稲葉秀賢

信心仏性ということは、宗祖が「信巻」三一問答信樂釈の下に、涅槃經の四無量心、大信心、一子地を仏性とする文を引用し、以て信心を仏性とあらはされたのに基くものである。ここ

に引用せられた『涅槃經』の理解については諸説区々としていくけれども、一応四無量心は如来の大悲心を示し、大信心は仏因としての大悲回向の仏性、一子地は往生の果を意味するといっているであろう。従てこの文が信樂釈の下に引かれたのは、それを私釈に対照すると、「斯の心即ち大悲心なるが故」というのは四無量心に相当し、「必ず報土正定の因を成ず」という報土正定は一子地に、「必ず……の因を成ず」というのは大信心に相当すると見られるのであって、此の經の引用はそれに依て大信心が如来回向のものであることを示さんとせられたのである。この意味に於いて『浄土和讃』に

「信心よろこぶそのひとを、如来とひとしときたまふ、大信心は仏性なり、仏性すなわち如来なり」といい、『唯信文意』廿一左に

「この信心すなはち大慈大悲の心なり、この信心すなはち仏性なり、仏性すなはち如来なり」とあるのもその意味である。

然るに『涅槃經』の一切衆生悉有仏性説は大乗仏教の極説であり、それは中国日本を通じて幾多の論議をひき起した問題である。殊に宗祖が学ばれた天台家にあっては、三因仏性の理論があり、精細な論究が加へられて来た。然るに宗祖がかうした仏性論には関心を寄せることなく、信心仏性を談じて、仏性の持つ実践的意味を明かにせられたのは何によるのであろうか。凡そ真宗の聖教にあっては、一切衆生悉有仏性を許す如くであり、また許さざるが如くでもある。即ち涅槃の真因たる信心の信相を明す二種深化にあっては、「自身は現に究悪生死の凡